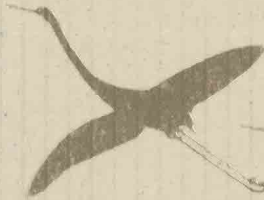


京都藝苑の

ネットワーク

高橋博巳著



京都藝苑の

高橋博巳著

ネットワーク

へりかん社

著者略歴

高橋博巳（たかはし ひろみ）

昭和21年（1946）生。東北大学大学院博士課程修了。

金城学院大学助教授。専攻・近世漢文学。

主著論文——『淇園詩文集』（『近世儒家文集集成』

9，編集・解説）ペリカン社，「独庵玄光と荻生徂徠」

（『文藝研究』98），「中根元圭と荻生徂徠」（同上

109），「俳諧と漢詩」（『金城国文』64）「徂徠学派の

崩壊」（『和漢比較文学叢書』7）ほか。

京都藝苑の
ネットワーク

昭和63年5月25日 初版第1刷発行

©1988

著 者 高橋 博巳

発行者 救仁郷 建

発行所 株式会社 ペリカン社

〒113 東京都文京区本郷2-24-4

振替・東京 0-48881 TEL 03(814)8515

印刷・ミクニ印刷 製本・小高製本

定価 2400円

書籍コード 1095-608428-7612

主要人名索引

* 現代の研究者名は省略した。

あ行

合田如玉 205, 210, 226
 赤松滄洲 157, 224, 226, 227, 230, 231
 芥川丹丘 36, 37, 102, 157, 206
 アドルノ, T. W. 175, 176
 安藤昌益 203
 池大雅 10, 18, 21, 39, 40, 46-70, 75,
 95, 104, 120, 162, 220, 242, 253, 256, 268
 池田光政 210
 石島筑波 259
 伊藤錦里 211-3
 伊藤若冲 10, 19, 21, 39, 40, 70-3, 75-
 86, 96, 228, 242, 245, 248, 263, 264, 266
 伊藤仁斎 170, 204, 211, 216, 227
 伊藤坦庵 211
 伊藤東涯 18, 89, 151, 204, 205, 211
 伊藤東所 18, 211
 伊藤竜洲 166, 211
 伊孚九 54
 維明 265, 266
 巖垣竜溪 (孟厚) 159-62, 164
 上田秋成 (余斎) 6, 10-12, 68, 89,
 123-5, 127, 128, 173, 180-2, 196, 205,
 210, 215, 235, 237, 238
 宇野士朗 206, 219
 宇野明霞 37, 164, 206, 209, 219, 226
 江村北海 93, 94, 160, 206-8, 211, 226,
 232

袁宏道 81
 袁随園 153
 王維 (摩詰) 53, 64, 76, 77
 王昭君 207
 王世貞 90, 92, 205
 歐陽玄 243
 歐陽修 217
 オープリー, J. 238
 大井蟻亭 206-10
 大江玄圃 269, 270
 大枝流芳 160
 大原吞響 (雲卿) 104, 264-6
 岡白駒 211
 尾形光琳 49
 荻生徂徠 20, 164, 169, 171, 205, 209,
 216-9, 227

か行

賀川玄悦 12, 234-6, 262
 賀川玄吾 262
 賀川玄迪 234, 236
 蠣崎波響 231
 賈島 34
 何鏗 61
 蟹養斎 44, 219
 狩野山雪 248
 亀井南冥 61, 252
 亀田窮楽 32
 河野鉄兜 221

岸駒 248-50
 観国 89
 神沢杜口 153
 韓大年 54
 菅茶山 69, 70, 91, 92, 231, 252, 259
 韓天寿 102
 祇園南海 50
 其角 127
 菊池五山 87, 88, 226
 几董 11, 123, 127, 133, 259
 暁台 116, 138, 140
 玉瀾 63
 金竜道人 40, 157
 工藤平助 190
 熊沢蕃山 210
 倉成竜渚 18
 黒柳召波(柳宏)→召波
 嵯康 80
 倪瓚(雲林) 51-4, 112
 月海元昭→売茶翁
 月隠(月仙) 252, 263, 264, 266
 化霖 22, 28, 29
 元政 109
 阮籍 80
 小石元俊(道) 12, 234, 236-8
 小石元瑞 234
 項羽 172
 高葛波(道昂) 70, 102, 259
 高啓(青丘) 52, 81
 黄公望(梅道人) 50-3
 黄山谷 81
 孔子 48, 213, 214, 245
 高芙蓉 18, 62, 120

高遊外→売茶翁
 呉月溪(呉春) 228, 252
 小式部内侍 130
 近藤西涯 210

さ行

西行(円位) 192, 193
 サヴァラン, B. 153
 佐々木琴台 89
 佐竹噲々(憤々) 100, 102, 104
 子夏 30
 志賀重昂 61
 司空図 207
 篠崎東海 259
 柴野栗山 19, 92, 104, 226, 227, 236
 謝春星→蕉村
 守鶴(守鶴・朱鶴) 183-7, 189, 190,
 191, 193, 194, 198
 朱子 222
 祝允明 80
 商鞅 92, 93
 召波 126, 127
 邵雍(康節) 33, 118
 徐渭 81
 ジョンソン, S. 203, 239
 ジョンソン, B. 238, 239
 沈周 53
 岑参 130
 申不害 92, 93
 杉田玄白 237
 鈴木修敬 164
 清田儋叟 12, 19, 68, 94, 95, 102, 151-
 69, 171, 174, 176, 182-4, 188, 190-4,

209, 211, 215, 217, 225, 236
 錢謙益 81
 宋屋 130
 宋玉 131
 莊子 39, 59, 72, 73, 159, 215
 曹霸 245
 曾我蕭白 10, 19, 228
 蘇軾 81, 152
 素堂 127

た行

大祇 156
 大潮元皓 22, 28, 29, 34-6
 大典(蕉中) 12, 21, 27, 34-7, 39, 40,
 46, 49, 54, 59, 60, 71-3, 75, 78-80, 82,
 96, 97, 104, 105, 184, 228, 237, 246, 259,
 263, 264, 266, 268
 戴嶧 245
 戴嵩 245
 戴文進 243
 平教経 188
 大魯 129
 高野蘭亭 42
 滝沢馬琴 237
 武田梅竜 157-9
 太宰春台 164
 只野真葛 191
 田中頤 239
 谷文晁 263
 田能村竹田 7, 64, 65, 68, 70, 220, 250,
 259
 端文仲 94, 100, 116, 257
 竹溪 195, 196, 198

陳簡齋 66
 鄭虔 76, 77
 程松円 81
 唐寅(伯虎) 50, 51, 80
 陶淵明 256
 董其昌 46
 杜甫(子美) 80, 127, 128, 205
 杜牧 80, 208

な行

内藤湖南 220
 中井竹山 179, 180, 181
 中井履軒 180, 181
 長沢芦雪 10, 140, 246, 250, 252, 253,
 256
 永田観鷺(俊平) 98-100, 230
 永田西河 230
 中村内蔵助 49
 夏目漱石 45
 那波活所 211
 那波魯堂 91, 92, 205, 210, 211
 新美南吉 179
 西村天囚 241
 西村伯恭 65
 西山拙斎(子雅) 91-4
 ノーマン, E. H. 203, 204
 野村東皐 21

は行

売茶翁(高遊外) 21, 27-32, 34-45,
 47-9, 59-61, 69, 75, 89, 97, 104, 268
 白楽天(香山) 80
 芭蕉 125, 128

服部南郭 9, 90, 125-9
 服部白責 (仲英) 126, 198
 万庵 90, 118
 潘岳 157
 伴蒿蹊 181
 范成大 81
 平賀蕉齋 198
 広瀬淡窓 203, 238
 藤岡作太郎 50
 富士谷成章 (仲達) 64, 159, 172-4,
 176, 205, 214, 219, 225, 226
 富士谷御杖 64
 藤原公任 136, 138, 148
 藤原康禎 241
 藤原道長 136
 蕉村 4, 7-11, 13, 18, 55, 56, 70, 86, 95,
 109, 112, 113, 116, 118, 119, 123-40,
 148, 153, 155, 193-8, 217, 218, 236, 237,
 242, 252, 256, 258-60, 262, 263, 266,
 268, 269
 古川古松軒 146
 ホイジンガ, J. 18
 北条霞亭 231
 細谷半斎 (合麗王) 42, 81, 180, 183
 細野要齋 43, 44

ま行

松浦静山 188, 190, 228, 230, 240, 241
 松平子染 211, 212
 松村梅岡 80, 90
 円山応挙 10, 18, 55, 99, 100, 113, 120,
 142, 215, 220, 225, 226, 228, 230, 231,
 242, 243-6, 248, 250, 252, 263, 266, 269

ミケシユ, G. 8, 21
 皆川允 216
 皆川淇園 (伯恭・文蔵) 12, 19, 22,
 51, 52, 62-4, 87-9, 140, 144, 145, 158,
 159, 161, 164, 166, 167, 173, 174, 203-
 42, 248-50, 252, 257, 259, 268, 269
 皆川白洲 205, 206
 源義経 188
 三宅元献 210, 211
 三宅彌山 130
 三宅道乙 210
 三宅亡羊 210
 宮瀬竜門 21, 89, 90, 93, 94
 三輪安立 165, 166
 無住 39, 40
 村上冬嶺 211
 紫式部 172
 村瀬栲亭 10, 11, 19, 65, 66, 81, 146,
 252, 258, 259
 室鳩巢 205
 孟浩然 73
 毛西河 222
 モーツァルト, W. A. 50
 望月玉蟾 50, 51, 214, 215
 望月宋屋→宋屋
 本居宣長 9, 173, 174
 森鷗外 5-7, 63, 231, 241, 266, 269

や行

柳沢淇園 48, 50, 203
 柳田国男 183
 梁田蛭巖 153, 210
 山片蟠桃 181

索引

山脇東海 236
 山脇東門 234, 236
 山脇東洋 158, 234
 湯浅常山 210, 211
 柚木太玄 232
 柚木太淳 232, 233, 262
 楊万里 81
 横谷藍水 42, 100
 与謝蕪村→蕪村
 吉田兼好 157
 吉益東洞 158
 米谷金城 228

ら行

頼春水 18, 237

嵐雪 127
 李于麟（滄溟） 90, 92, 128, 129, 205
 李賀 270
 陸機 124
 六如 12, 21, 42, 60, 64, 73, 74, 80, 81,
 86-98, 100, 102, 104-8, 113, 114, 116,
 118-20, 140, 142, 146, 147, 168, 230,
 231, 237, 242-5, 268
 陸游 80, 87
 李善 132
 李白 69, 99, 128, 129, 132
 劉邦 167, 172

わ行

ワアルベルヒ 5, 6, 7

目次

†プロローグ——倫敦の蕪村 3

I 十八世紀後半の京都文化社会 15

II 売茶翁サークル 25

†売茶翁の誕生 27 †池大雅 46 †伊藤若冲 70 †六如庵慈周 86

III 「かな書きの詩人」蕪村 121

†俳諧と漢詩 123 †嵐峽下り 133

IV 清田儋叟の世界 149

†儋叟の魅力 151 †儋叟の学問 166

V 奇談三題——儋叟・秋成・蕪村 177

VI 皆川淇園の時代 201

†生涯と交遊 203 †詩人と画家 242

†エピローグ 268

後記 271

引用図版一覧 275 人名索引 巻末

† プロローグ——倫敦の蕪村——

近ごろ、ロンドンとミュンヘンに短い旅をした。衰退が喧伝されて久しい英京ロンドンでは、街のあちこちに「売家」の標識が目立ち、また廃墟寸前のような所もあって、地下鉄も薄汚れ、総じて「昔の光、いまいずこ」の感は否めなかった。しかし、確かにそうした一面はあるにしても、それを補って余りある他所にはない魅力が英国にはある。春なお浅いロンドンで図書館に通うかたわら、博物館や美術館に立ち寄り、コンサート・ホールや劇場に足を運んで、至福の時間が過ごせるのも、そうした魅力の一つであろう。ロイヤル・フエスティバル・ホールやコヴェント・ガーデン歌劇場などの大きなホールも悪くないが、街の小さな劇場の雰囲気にもなかなか捨て難い味があった。

そうしたある晩、たまたま通りかかったタインズ・シアターで舞台をながめているうちに、ふと思ひ当たることがあった。唐突な連想ながら、そこで私が思い出したのは、江戸時代の俳人、与

謝蕪村（一七二六—一八三三）のことである。この画家にして俳人の巨匠は、またエビキュリアン享楽主義者の芝居

好きでもあった。その点を考慮に入れないと蕪村藝術の十分な理解は得られないと、かねて私も考えないではなかったが、頭でそう考えるのと、なるほどそうかと体感するのはやはり違うということに、遅蒔きながらロンドンで気付いたのである。ロンドンの伝統が江戸時代の文化を髣髴とさせたと言えるだろうか。

*

さてロンドンに別れを告げ、午後遅くギャトウィック空港を飛立って二時間余り、機内食のハイ・ティーを楽しむ間もなく、我々の乗った飛行機は暮れなずむミュンヘン空港に到着した。ちょっと袖が触れても「ソーリイ」を発する君子国から、いきなりババリアの地に身を置き換えると、この地の人々の荒っぽさが気にかかる。それにミュンヘンでは、ロンドンであまり感じなかった視線が気になることがあった。

ある夜、シュターツ・オーパーで「ロメオとジュリエット」を見たときのことである。たまたま隣に坐った夫人は、席に着くやチヨコレートを取り出して指をなめつつ食べるような人であったが、その人が私ども夫婦の席の前を通るとき、尊大な目付きは、あまり気持ちのいいものではなかった。旅は人を詩人にする。私はそのとき、「ババリアの視線冷たきオペラかな」の一句で、その横柄な視線を封じた。

*

明治十九年（一八八六）三月八日、ドイツに留学中の森林太郎（一八六二—一九二二）はドレスデンからミュンヘンに移った日の日記を、次のように記している。

午前十一時 ミュンヘン府に着し、独帝客館 Hôtel Deutscher Kaiser に投ず。岩佐新を鐘街 Glockenstrasse No. 12 (Fraulein Schmidt's Pension) に訪ふ、逢はず。此日街上を見るに、仮面を戴き、奇恠なる装を為したる男女、絡繹^{わくえき}織るが如し。蓋し一月七日より今月九日 Aschermitwoch に至る間は所謂謝肉祭 Carneval なり。「カルネ、ワレ」carne vale は伊太利の語、肉よさらばといふ義なり。我旧時の盆踊に伯仲す。夜ワアルベルヒとゲルトネルプラッツの Gaertnerplatz 劇場に入る。後中央会堂 Centralaal に至る。仮面舞盛を極む。余も亦大鼻の仮面を購ひ、被りて場に臨む。一少女の白地に緑紋ある衣装を着、黒き仮面を蒙りたるありて余に舞踏を勧む。余の曰く。余は外国人なり。舞踏すること能はず。女の曰く。然らば請ふ来りて俱に一杯を傾けんことをと。余女を拉^ひいて一卓に就き、酒を呼びて興を尽す。（『独逸日記』）

「絡繹」は連なり続くさま、往来の絶えないこと。このとき同行した「魯国のワアルベルヒ」について、鷗外が前日の日記に「ワアルベルヒは医にして詩人なり。好みて伝奇を作る。其作中芬蘭の劇場にて世人の喝采を博したる者甚だ多し。年既に五十に近けれども、活発々地少年の人の如し。常に芬蘭を以て故国と為す。其魯国に属するを甘んぜざる者の若し」と述べているのを見れば、

このワアルベルヒこそは当時二十五歳の青年鷗外の、その後の生き方のモデルとなったことがわかる。「芥蘭」はフィンランド、一八〇八年よりロシアの支配下にあった。周知のように鷗外も「医にして詩人」となって、多くの「伝奇」を書き、そしてその生涯を「石見人」として終えた。⁽¹⁾ワアルベルヒの「芥蘭」、変じて鷗外の「石見」となる……

*

しかし「医にして詩人」の先例ならば、ワアルベルヒを俟たずとも、我が江戸時代に文雅の嗜みを有する「医」は少なくなかった。彼らはおおむね漢学を修め、兼ねて文学にも手を染めたからである。手近なところでは、『雨月物語』の作者も一時「医」を業としていたことがある。上田秋成（一七三四—一八〇九）——漁焉^{ぎょえん}および無腸という俳号を持つ「医にして詩人」、また「伝奇」を書いた『春雨物語』の傑作がある。そこで、たとえば「菊花の約」^{ちぎりのちやく}（『雨月物語』新潮日本古典集成）の左門の言葉、「死生命あり。何の病か人に伝ふべき。これらは愚俗のことばにて、吾が們^{ともがら}はとらず」とか、「母なる者、常に我が孤独を憂ふ。信^{まこと}ある言を告げなば、齢も延びんに」のような言葉使いを、いま仮に『舞姫』における豊太郎やエリスのものとしても、さまで不自然でないのは、鷗外の初期作品が江戸と明治の境を越えて、百年前の読本^{よみほん}と連続している面があることを示しているだろう。

ところで、ワアルベルヒと鷗外の兩人は、ゲルトナープラッツ劇場で何を見たのであろうか。それから百年後に「民^{ミヤコ}顯府」を訪れた我々も、わずかに残っていた天井桟敷席の客となって、一夜、シュトラウス (Johann Strauss Sohn, 一八二五—一九九) のオペレッタを楽しんだ。幕間に階段を降りていると、階上の控室に駆け上がってくる指揮者とすれちがったりするような、インティメートな劇場であった。隣席の年配の婦人は、曲が始まると一緒に歌い出して、私にこれはウィーン音楽だと小声で教えてくれた。芝居のたのしみのお裾分けにあずかったような気がして、そこでも再び私は蕪村を想った。

*

ロンドンとミュンヘンで私が思い出した蕪村は、シアター・ゴウアーとしての蕪村である。田能村竹田 (一七七七—一八三四) が伝える有名な話に、ある夜、弟子の一人が蕪村宅を訪ねたところ、戸締まりをした家の中から、ハタハタと音がして叫び声が聞こえたので、心配した弟子が戸をたたくと、はたして蕪村が出てきて、今夜は家族もいないので、このまえ見た芝居の役者の藝に感心のあまり、箒と塵取りで真似をしていたのだというのがある (『屠赤瑣瑣録』二、『田能村竹田全集』國書刊行會、一九二四年)。

蕪村はまた、晩年の手紙に、

いつもとハ申ながら、此節季かねほしやと思ふことに候。けふハあまりのことに手水鉢にむか



い、かゝる身ぶりいたし候得共、其かねこゝに、といふ人なきを恨候。

(佳葉福人宛十二月二十七日付書簡、『蕪村集』古典俳文学大系、集英社)

と書いている。「ひらがな盛衰記」の傾城梅ヶ枝さながらに、「ア、金がほしいなア」と演じて見せるような根っからの芝居好き、これが蕪村であつた。⁽²⁾

その芝居好きが高じて、作品のなかで自ら采配をふるつてみせたのが「春風馬堤ノ曲」(『夜半楽』)である。蕪村の説くところによれば、

余幼童之時、春日清和の日ニハ、必友どちと此堤上ニのぼりて遊び候。水ニハ上下ノ舟アリ、堤ニハ往来ノ客アリ。其中ニハ、田舎娘の浪花ニ奉公して、かしこく浪花の時勢^{はやりすぎ}粧に倣ひ、髪かたちも妓家の風情をまなび、正伝しげ太夫の心中のうき名をうらやみ、故郷の兄弟を恥いやしむもの有。されども、流石^{さすが}故園ノ情ニ不堪、偶親里に帰省するあだ者成べし。浪花を出てより親里迄の道行にて、引道具ノ狂言、座元夜半亭と御笑ひ可^レ被^レ下候。実ハ愚老懷旧のやるかたなきよりうめき出たる実情にて候。(安永六年二月二十三日付書簡)

とあって、蕪村は「引道具ノ狂言、座元夜半亭」として、ディレクターの役までつとめているのだ。そして、これは浪花に奉公した「田舎娘」が、しばらく都会の風にあたつて「あだ者」に変身し、流行のファッションに身をつつみ、帰省するさまを描いたフィクションであるかに見えて、しかし「実ハ愚老懷旧のやるかたなきよりうめき出たる実情」だと蕪村はいうのである。この条を読

んで思い合わされるのは、本居宣長（一七三〇—一八〇一）の周知の一節、「大方人の実の情といふものは、女童のごとく未練に愚かなるものなり」（『紫文要領』下、『本居宣長集』新潮日本古典集成）である。日野龍夫氏の校注（同書、二〇二頁）によって、服部南郭（一六八三—一七五九）の『南郭先生燈下書』（享保十九年刊）の「風雅の情」ないし「風人の情」の影響がここに認められるとすれば、蕪村もあるいはそういう影響を受けたのであるかもしれない。⁽³⁾

*

いずれにしても、このように生活と密着した、あるいはその一部として「芝居」を楽しむことは、日々せわしなく暮らしている我々が、既に忘れてしまった習慣である。それが海彼ロンドンやミューンヘンには懐かしくも今なお健在で、私は芝居好きの蕪村もこういうふうには芝居を楽しんでいたのかと、想像を逞しくしたのである。規模や種類こそ違え、同様の楽しみを生きていたのが、突飛なようだが蕪村たちの時代でもあったのだ。

ロンドンの芝居から蕪村に及んだ連想は、こうして蕪村の生きた時代と場所にまで延びていかざるを得ない。何をかくそう、江戸時代も半ばを過ぎた十八世紀後半、宝暦—天明年間の京都こそは、蕪村をはじめとして、元禄・化政の二大文化を担った人々に勝るとも劣らない人材が、まさに百花繚乱、各分野に輩出した特筆すべき地域であり、時代であった。

その京都の文化がどの程度のものであったか、いま仮に当時の画家たちの名を列挙して示せば、